

[総合的な学習の時間]

小学校高学年におけるキャリア発達を目指した 総合的な学習の時間の単元開発

— 地域との「参画型職業体験学習」を通して —

笠原 祐樹*

1 はじめに

2011年の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」において、キャリア発達にかかわる基礎的・汎用的能力が「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つに整理された。新潟県では2011年に「新潟っ子をはぐくむキャリア教育のすすめ」が発行され、キャリア教育のモデルプログラムとして「新潟っ子プラン」が示された。取組の柱として、4つの基礎的・汎用的能力の育成に加え、「郷土愛を軸としたキャリア教育の推進」を位置づけているところに特色を見出すことができる。本県においても、キャリア教育は重要な教育施策として位置付けられている。

このような社会状況を踏まえ、担任をした小学校6年生児童24人に地元での就労希望等に関して問いかけ、学級全体で話し合った。その結果、次のような意識であることが把握できた。

- ・「地元で暮らしたい」「家の仕事を継ぎたい」など、地元で生きていきたいと考えている児童が半数以上。
- ・将来の夢を具体的に書く児童は、24人中10人。“将来もふるさとに住みたい”という、漠然としたイメージはあるものの、それにつながるための職業への意識が低く、具体的な進路や将来の職業をイメージできている児童が少ない。
- ・24人中23人が「ふるさとが好き」と回答。しかし、具体的に自分の郷土の魅力を述べる子は非常に少なく、郷土愛が十分に育まれているとはいえない。

典型的な児童の記述は次のとおりである。

ぼくは大人になっても妙高市で暮らしていければいいな、と思っています。生まれ育ったところで、妙高市のことが好きだからです。(A児)

私は自然がいっぱいで暮らしやすいから、妙高市が好きです。大人になったらどうするかは、まだよくわかりません。(B児)

妙高市のことは好きなのもあるけど嫌いなところもあります。自然が多いのはいいけど、何もないのが…。東京のように買い物できる場所があるといいなと思います。私は将来は東京などに出て、仕事をしていきたいです。(C児)

A児はふるさとについて肯定的にとらえてはいるものの、「～いいな」という漠然とした願望である。B児も肯定的にとらえているが、「自然がいっぱい」なことが「暮らしやすい」にどう結び付くのか明確でなく、漠然としたイメージで書いていることが予想される。C児は東京へのあこがれが強く、自分のふるさとに対してあまり肯定的にはとらえていない。

こうした本学級の児童の実態から、郷土への愛着を十分に形成し、基礎的・汎用的能力を育んでいくキャリア教育を進めることの必要性を強く感じた。これまでのキャリア教育の実践をたどってみると、「一人一人のキャリア発達を促す総合的な学習の時間の取組」(齋藤2012)など、中学校での職業体験学習の実践が数多くなされている。そんな中、「未来を見つめ、夢をもち努力する子どもを育成するキャリア教育の在り方」(関2008)において小学校での職場体験学習を取り入れた実践が行われ、小学校においても、職場体験学習が「職業観」「勤労観」を育成するのに効果的であることが示されている。しかしながら、関の実践は1日だけの職場体験しかしていない。もっと企業や職業に繰り返し関わることで、よりキャリア発達が促せるのではないかと考えられる。また、「郷土愛を育み、自己の生き方や将来に

* 上越市立高志小学校

ついて考える単元開発」(長谷川2015)では、郷土愛を育みつつ、職業観を育てていく実践が行われている。それによると、地域の職業人と関わることで、職業観が育まれていったことがわかった。本県のキャリア教育の推進課題においても、郷土愛の育成は重要な位置づけとされている。長谷川実践のように地域の人との関わりを大切にしつつ、児童の創意工夫を活かせるようにすることで、児童の主体性を高め、更なるキャリア発達につなげていきたいと考えた。

そこで、郷土を愛し、盛り上げようとする人々と共に、主体として真剣に働く活動を仕組み、地域の人々の郷土への思いと共に活動することがキャリア発達につながっていくことを明らかにしていくこととする。

2 研究の目的

地域振興に取り組むふるさとの人々の熱意や工夫に繰り返し関わらせ、自らの創意工夫を活かせるような参画型職業体験学習を行うことによりキャリア発達が促されることを明らかにする。

3 研究の内容

本研究における職業体験学習では次の2点を重視していく。

(1) 地域振興に取り組んでいる人や組織と繰り返し関わること

関の実践により、小学校段階においても職業体験学習が児童のキャリア発達に効果があったことは明らかにされている。本研究では、繰り返し対象と関わることで、よりキャリア発達が促されていくことを検証する。そのために、春から何回も対象である人や組織に関わっていけるよう単元構成していく必要があると考えた。そこで、今回は地元の新井商工会議所に協力いただき、地域振興に取り組んでいる校区内の地元企業と関われるような手立てを図っていく。そのことによって郷土への愛着形成にも効果があると考えた。

(2) 職業体験を「参画型」にし、児童が創意工夫して活動できるようにすること

与えられた仕事や、指示された仕事だけをこなしていくような職業体験学習では、キャリア発達には不十分だと考える。児童が自ら考え、行動し、その成果を実感できるような取組にしていきたいと考えた。そこで上記した組織と連携し、児童に裁量を与え、試行錯誤しながら取り組むことができる体験学習にしていく。このような職業体験学習を「参画型職業体験学習」と定義づけていくこととする。

4 実践

地元企業の地域活性化の活動に、児童が能動的に参画していけるように、次のように年間の活動を構成した。

「ふるさとのためにできること ～わたしたちの本気～」70時間			
「本気の」イベントに参画しよう 55時間			自分たちのイベントを創ろう 15時間
「ふるさとの 実際を知ろう」(10) ・高田の駅前にでかけよう ・ふるさと新井の駅前はどう なっているのだろう ・ふるさと活性化の取組を知 ろう	「うまいもんまつりで ふるさと活性化！」(15) ・地元で活躍する企業の取組を 知ろう ・企業と一緒にまつりで地元を 盛り上げよう ・お客さんを集めるためにはど うしたらいいのだろう ・うまいもんまつりで100食売 り切ろう	「街祭でふるさと活性化！」 (30) ・街祭について商工会議所の方から学ば よう ・どんなイベントにしようか考えよう ・参加を呼び掛けるPR活動をしよう ・街祭の情報を宣伝しよう ・街祭成功に向けて準備をしよう ・街祭でふるさと活性化！ ・成果と課題を商工会議所に伝えよう	「ありがとう和田地区！ ほくたちにできること」 (15) ・ふるさとのために自分たちがで きることは何だろう ・和田地区への感謝イベントを考 えよう ・感謝イベントの準備をしよう

そして、次のような視点から4ステップの活動を仕組んだ。【 】は活動の視点

ステップ1 【ふるさと新井の現状を知り、よりよくしていきたいという動機を形成する】

ステップ2 【地元企業の活動に触れ、共に働くことを通して、ふるさと活性化に向けた実践意欲の高揚を図る】

ステップ3 【街祭への一翼を担う活動を通して、地域の人々と連携して地域活性化に向けた活動体験をする】

ステップ4 【住んでいる地域への感謝イベントの企画運営を通して郷土愛を培う】

本研究では年間活動計画の中のステップ1「ふるさとの実際を知ろう」からステップ2「うまいもんまつりでふるさと活性化!」の活動に焦点を当てる。「妙高あらいまもんまつり」に地元企業とタイアップして参画し、児童の裁量で豚汁販売屋台の運営を行うことで、キャリア発達が促されていったことを明らかにしていく。

(1) ふるさとへ目を向けさせる導入

児童の意識をふるさとへ向けさせるためには、導入で児童が「楽しい」と思える活動をし、この学習へ児童の目を向けさせることが必要と考えた。そこで、年度の初めにまず、高田公園観桜会に出かけた。高田公園観桜会は、全国からも観光客が訪れる華やかなイベントである。高田の駅前もそれに合わせて賑わっており、活気のある中で児童はイベントの楽しさを十分に味わうことができた。近隣の町の賑わいに出会う体験は、自分たちが住む町“新井”を見直す機会となった。そして、「自分たちの地元はどうなっているのか気になる」というA児の発言につながった。「地元の駅前商店街はどうなっているのだろう」という児童の思いから、地元の新井駅前商店街へ出かけることにした。店は開いているものの、店内で買い物している人は少なく、行きかう人も高齢者の方が多い。また、街中には高齢者向けの運動設備を有するスペースが設けられ、高齢者の利用が多い現状を施設からもうかがうことができた。

- ・駐車場が高田よりも広くて、高齢者向けのストレッチ広場や、子どもの遊技場がある。
- ・病院や薬屋には人がたくさんいるが、商店街自体には人がいなくて寂しい。
- ・高田は街のPRをたくさんしていたけど、新井はPRが少ない。
- ・高田と比べると買い物している人は少なく、にぎわいが足りなかった。車の通りは多かった。

児童は上記のような感想をもった。下線部に注目すると、この時点で多くの児童の目が地元に向けたことがわかり、ふるさとへの関心の高まりが伺えた。また、地元のよさを見つけ出そうとする児童の思いも感じ取ることができた。このように、出会いの場を工夫したことで、児童の意識をふるさとへ向かわせることができたのではないかと考える。

(2) 商工会議所との連携

キャリア発達を促していくためには、疑似体験ではなく本物の体験をすることが大切だと考える。そのためには学校の中だけでは限界がある。地域や企業などの外部の機関と連携を図り、本物の体験をすることで学習が充実する。

本計画では、地域に目を向けさせるだけでは具体的な活動につながらないと考え、地元の新井商工会議所と連携を図った。教師と会議所職員の打ち合わせだけでなく、児童が直接商工会議所に出向き職員と話をすることで、意思疎通を密にすることができた。そこから、商工会議所の皆さんの「新井を元気にしたい」という願いを児童は強く感じていた。

そのような関係になってきた頃、学区内にある豚汁の専門店と連携し、「妙高あらいまもんまつり」というイベントで豚汁の販売を行うことを新井商工会議所の方から児童に提案してもらった。「地元企業とタイアップしてイベントに出店しないか」という投げかけを、地域を盛り上げようとしている商工会議所の方からの話として児童に伝えた方が意欲的に取り組めると考えたからである。案の定、児童らは快諾し、イベント出店へ向けて活動が始まった。

(3) 味覚を通じた地元のよさの再認識

児童は体験を通して学ぶ。とりわけ、五感を通して得たものは、忘れがたい。児童自身がその商品の良さを十分に分からなくては、うまいもんまつりで出店することなどできないと考え、全員で出店する商品である豚汁を味わいに出かけた。地元でありながら、食べたことのない児童も多く、豚汁の試食を大変楽しみにしている児童が多かった。店のこだわりを教えてもらい実際に食べてみると、「うまい!」「トロトロでおいしい」という声が挙がり、体験を通して「商品の魅力」に気づいていく様子が見られた。事後の振り返りには、「あのおいしい豚汁を大勢の人に食べてもらいたい」という発言があり、自ら発見した商品の魅力を伝えたいという意欲が感じられた。児童は自分の味覚で商品の良さを十分に感じ取ることができ、それを自分が働くための動機づけにすることができた。

(4) 「自分たちの店」の主体的な制作

妙高あらいまもん出店のために、試食後、複数回に渡って企業の店舗や学校で店主や店員、商工会議所の職員から思いを語ってもらう機会を設けた。児童はメモをとったり考えたりしながら話を聞いていた。しかし、その思いを実感として理解している状態ではなかった。児童の気持ちが高ぶったのは、実際に働く姿を目の当たりにしたときである。目の前で、調理する姿に目を輝かせ、「おお〜」「すごい!」などのつぶやきが聞かれた。実際に働いている姿そのものが児童の意欲を高めた。

また、出店にあたり、屋台の外装・内装などの準備や当日の運営は児童がすることになった。具体的には、①ポップ作成と屋台のレイアウト、②呼び込み、③客の誘導、④会計の4つの仕事をした。①は準備や当日の販売までの仕事、

②～④は当日販売中の仕事になる。それぞれ最低限やるべきことは店主より伝えられたが、基本的には、児童の自由な発想を活かして屋台作りとその運営を行うこととなった。この時点で児童には裁量が与えられたとともに、売り上げの責任を一人一人が感じるようになった。話し合いの結果、①は全員で行い、②、③、④はチームに分かれて活動した。

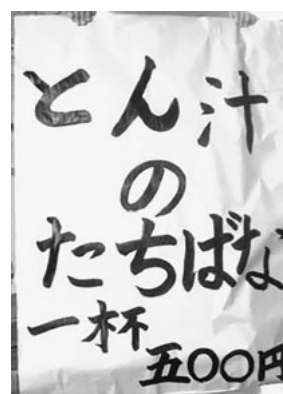
① 宣伝用品作成と屋台のレイアウト

宣伝用品は全員で分担して作成することにした。しかし、どのようなものを作ればいいのかイメージしきれない児童も多かったため、まずはいろいろなイベントでの屋台の写真をインターネットで集め、どのようなものが目をひくのか考えた。また、春に全員で訪れた高田公園観桜会の様子を想起したり、それぞれが見たことのある屋台の様子を思い出したりした。児童の発想を活かすにしても、何もない状況からは中々新たな発想は生まれてこない。イベントの屋台の様子をしっかりイメージできたところで、屋台に置く値札と宣伝用で持ち歩くポスターを制作することに決まった。

値札については、必要な情報が客に伝わることを意識して制作した。店主から商品名と値段を示すことが大切だと教わっていた児童は、他に必要な情報はないかと話し合った。自分の経験や見聞きした物を思い出し、販売状況がわかるようにするのも大切だと判断し、三角柱型の値札を作った。1面には「とん汁営業中」「1杯500円」と書き、別の面には「売り切れました」、もう1面には「仕込中」「しばらくお待ちください」と書いた。客が一目見てわかるようにという発想から生まれた工夫である。企業の教えに自分の経験を合わせ、児童独自の工夫が表れていた。

ポスターについては、それを宣伝隊が持ち歩くため、簡単に曲がらないようにラミネートをした。また、商品と値段がわかるように、必要な情報を全面に書くようにした。自分たちが実際に宣伝するときのことを考えながら、作り上げることができた。

また、「もっとインパクトのある看板を作って、お客さんの目を引こう！」という提案から、写真の看板も作る事にした。これは、自分たちの作ってきた値札やポスターだけでは伝えきれない情報があると感じ、「もっとインパクトのあるものを」という考えから生まれてきたアイデアである。客の目を引くために、シンプルなものにするということにこだわりを持って看板の制作も行った。



〈児童の製作した看板〉

② 呼び込み

宣伝用のポスターを使って呼び込みを行った。「お客さんの目を見て、ていねいに」を合言葉に、声を張り上げ、一生懸命に呼び込みする姿が見られた。当日は会場内のステージの音響に圧倒されたり、突然の豪雨に見舞われたりと苦労しながらの呼び込み作業となった。雨の中、「なんでみんな聞いてくれないんだろう…。」とつぶやいていたA児は次の感想をもった。

うまいもんまつりは雨だったのですが、たくさんの方が来ていました。ぼくが声を出しても全然振り向かなかつたけど、テントにはすごい人がいました。地域の人達はぼくたちのやったことをしっかり見てくれていたのだと思います。ぼくたちのやったことは価値あることだと思いました。

A児は自分の活動を振り返ったときに、自分たちの頑張りを地域の人が見てくれていたことに喜びを感じ、そこに働くことの価値を見いだしたのである。

③ 客の誘導

客の誘導係は「お客さんが混乱しないように、列の整理や最後尾を知らせる人が必要だ」という児童のアイデアから生まれたチームだった。激しい降雨と予想以上の来場者により会場が大混雑したことで、誘導係は活躍の機会に恵まれた。状況に応じて、声のボリュームをアップしたり、全体ではなく一人一人に分かるように声をかけたりして行動に工夫をしていた。練習の段階から、チームの中心になって活動していたB児は、次の感想をもった。

大きな声を出して身振り手振りで、お客さんが不快な思いをせずきれいに並べるように頑張りました。いつもは、だれかが声をかけてからじゃないと動けない私だったけど、うまいもんまつりでは、私がやるしかない積極的に行動することができました。

「自分たちの屋台を自分たちで運営する」という明確な目的意識に支えられた取組が、B児の責任感を育み、主体的な行動へと変容させたといえる。また、B児自身が自分のキャリア発達を自覚することができたことも読みとれる。

④ 会計

客との金銭のやりとりも児童が責任をもって果たすことにした。レジを店から借り、事前に何度も練習をした。「レシートは渡した方がいいのか」「どんな言葉遣いをしたらお客さんが気持ちよく買っていただけるのか」など、いろいろなことを話し合いながら、一つ一つ確認し、当日を迎えた。当日は実際のお金のやり取りに緊張していたが、練習を重ねたおかげで、しっかりと対応することができていた。会計係になったC児は次の感想をもった。

販売の仕事はありがたいの気持ちをもたないとお客さんが来てくれない。また、努力することが欠かせないと思った。ここまでお客さんが来てくれたのも事前の練習などの努力があってこそその結果だと思う。販売のおもしろさと大変さを学びました。

誰かに指示された活動ではなく、自分たちで主体的に努力した取組だからこそ、「販売のおもしろさ」としてとらえることができたのであろう。

(5) 活動の成果の振り返り

当日の活動全体を通して、共に働いた店員の方の言動が児童に好影響を与えていた。児童と共に働く店員が、誰よりも大きく「いらっしゃいませ」「ありがとうございます」と声を出す姿を見て、児童の声もどんどん大きくなっていった。話を聞くだけでなく、共に働くことで得られる子どもへの影響の大きさは明らかであった。

販売後、店主からは、「みなさんの熱い思いが伝わってきました。今後自分たちがくじけそうになった時などにみなさんと頑張ったことを思い出して頑張っていきます。今回、みなさんが色々な状況を想定して努力したことが、予定数を超える売り上げにつながったのではないかと思います。この経験を次につなげてください。」と激励していただいた。児童と共に実際に働いた店員からは「みんなと一緒に過ごした時間がうれしくて、楽しくて、お客さんやみんなやたくさんの人からありがたいをもらえたことが心に残っています。今回感じたことを、これからは活かしてもらいたいです。」と励ましの言葉をいただいた。一緒に活動した地元の大人からの「本気の」メッセージは児童に強い印象を与えた。児童が書いたお礼の手紙の抜粋を以下に載せる。

- ・私のお店がすごいと思いました。それは、古くから地元で愛されていてお年寄りからもすごい人気だったことと、どんなに忙しくても「いらっしゃいませ」と元気に言っていることです。ぜひこれからも続けてください。今回たくさんのことを学びました。ありがとうございます。
- ・食べているお客さんが「おいしい」と笑顔になってくれてすごく嬉しかったです。40年以上もお店をやっているのは地元のお客さんの笑顔があるからなのではないかと思いました。これからも頑張ってください。食べに行きます！

5 考察

(1) 地域振興に取り組んでいる人や組織と繰り返し関わること

春から継続的に商工会議所の職員と関わり、その思いや願いを感じ取っていた児童は、同会議所が運営するイベント「妙高あらいまもまつり」に参加する際にも「絶対成功させたい」と強い決意をもって臨んだ。イベント当日も、顔見知りとなった商工会議所職員の働く姿は児童の目に憧れとして映った。以下はA児、B児の感想である。

- ・商工会議所の方のやる気に驚いた。自分たちでイベントをするということの責任はすごくあるのだと思った。ほくたちもがんばらないといけないと思った。（A児）
- ・商工会議所の方が一生懸命働いていた。地域を盛り上げるためにイベントを成功させたいという気持ちがすごく伝わってきた。私もこのイベント、絶対成功させたいと思って一生懸命働きました。（B児）

下線部から、本気になって働く地元の大人の姿が児童を刺激し、「ほくたちもがんばろう」という意欲を生み出すことにつながったことがわかる。学習前のアンケートで漠然と願望だけを語っていたA児が、責任を感じ主体的に働こうとするようになり、郷土への漠然としたイメージだけだったB児が、郷土を盛り上げようと自分の思いを前面に出して活動した。関わり続けた人の姿であるから、児童らは上記のような思いに至ったものと捉えることができる。

また、繰り返し地元企業と関わりをもって活動していったことで、「地元で頑張っている大人」像を児童に明確にもたせることができた。そのことが児童の心を変容させていったことを学習のまとめから伺うことができる。

- ・ふるさとの人達が、頑張っているのだから、私はふるさとのために行事にこれからも参加することを決めた。自分たちで「何とかしたい」「何かすることはないか」と考えた。ふるさとへの気持ちが変わった気がする。(C児)
- ・妙高が大好きな人、そのために頑張る人をたくさん見つけました。妙高の人は心が広く、優しい人が多いということに気が付きました。そして、その実際を知り、妙高のために何かをしたいと思えたことが私の成長です。(B児)

学習前のアンケートでふるさとに対して否定的なとらえをしていたC児が下線部のように意識を変えた。児童の職業観とともに郷土愛が育まれたことがわかる。また、B児は今回の学習を通してふるさとの人の人柄を感じ取り、そこから自分の考えを変化させていこうとしていることにキャリア発達が進められたことが見て取れる。

児童はふるさとの良さを、地元の人と関わることで再認識した。ふるさとのために本気で取り組む大人の熱意を感じ取り、「自分はふるさとのために何ができるのか」と考えながら活動をするまでになった。地元の人との深い関わりに支えられた活動により郷土愛が深まり、児童が自分自身のあり方を考えるようになったことがわかった。すなわち、ふるさとの人々の熱意にふれて活動することが児童のキャリア発達に結び付いたといえるだろう。

(2) 職業体験を「参画型」にし、児童が創意工夫して活動できるようにすること

屋台のレイアウトから当日の仕事まで、多くのことを任せられた児童は、責任感をもって活動に没頭した。以下に学習のまとめを載せる。

- ・うまいもんまつりの体験でイベントの楽しさ、おもしろさ、満足感、「自分たちで成功させる」という熱意を感じることができました。これまではあまり積極的に活動できなかったけど、うまいもんまつりではそれができました。それは、お客さんを困らせないようにするため、自分の仕事の責任があるからです。
- ・僕達は人を喜ばせる仕事をした。呼び込みをしていると「おいしかった」と言ってくれる人がいっぱいいた。それだけ人を喜ばせる仕事ができたと実感した。

児童自身が創意工夫をしたことで、自分たちの仕事を果たそうとする態度や、仕事を果たすことの意味を児童なりに捉えたことがわかった。苦労もあったが得られたものは大きかったと考える。創意工夫を活かせる参画型職業体験を行ったことで、児童の職業観・勤労観は育まれ、キャリア発達が促されていったといえる。

6 成果と課題

地元の企業や商工会議所の協力により、「地元を何とかしていきたい」という熱意が十分に児童に伝わり、それを果たす意味や良さを自分事として考える児童が現れた。また、創意工夫を活かせる参画型職業体験であったために、児童同士が関わりながら、自分の考えをもって活動することができた。主体的な活動での成功体験が、働くことへの充実感や満足感を実感することにつながったといえる。また本実践を通して、自己の変容を感じ取ったり、他者と関わりあうことの良さを感じ取ったりする児童も現れた。今回重視した2点によってキャリア発達が促されたといえるだろう。

さらに、職業観にとどまらず、自分の人生観を変容させるような児童や、コミュニケーション力の向上について実感する児童も現れた。このことから、基礎的汎用的能力についても育まれたことがわかった。今後は、基礎的汎用的能力についてより着目し、研究を深めていきたい。

引用・参考文献

- 1) 中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」, 2011
- 2) 新潟県立教育センター「新潟っ子をはぐくむキャリア教育のすすめ」, 2011
- 3) 新潟県教育委員会「平成27年度 学校教育の重点」, 2015
- 4) 齋藤忠之「一人一人のキャリア発達を促す総合的な学習の時間の取組」教育実践研究第22集, 上越教育大学学校教育実践研究センター, 2012
- 5) 関和則「未来を見つめ、夢をもち努力する子どもを育成するキャリア教育の在り方」教育実践研究第18集, 上越教育大学学校教育実践研究センター, 2008
- 6) 長谷川亜耶「郷土愛を育み、自己の生き方や将来について考える単元開発」教育実践研究第25集, 上越教育大学学校教育実践研究センター, 2015